

若者の活字離れは危惧されることなのか

5年 ●●

指導教員：●●

【研究①】

- ・「若者の活字離れ」という単語はよく耳にするが、「若者」の定義は不明であるので、その定義を調査する。

- ・また、近年はスマートフォン等電子機器でweb上の記事や文字情報を読むことが多くなってきたと予想されるが、「若者の活字離れ」にこのようなデータが含まれているのか調査する。

- ・上記の調査を行った上で「若者の活字離れ」が本当に進んでいるのか調査する。

※「活字離れ」については「読書率の低下」と定義する。また、読書に関してはweb上のデータも含むこととする。

【調査】

- ・日本出版学会春季研究発表会発表資料（2015年/5/16）
「**活字離れ**」論の文化史 ―「定義」と「統計」の実践研究―
- ・上記の論文に加え、文化庁の「国語に対する世論調査」、毎日新聞社広告局の「学校読書調査」「読書世論調査」から調査を行った。

※若者の定義は右の「活字離れ」論の文化史の10代・20代とする。



【研究①の結果】

- ・論文等を参考にした結果、活字離れ自体の定義は発信者にゆだねられており、データの取り方一つでも差異が見られ、事実として進行していると客観的に判断しがたい状況にあることが分かった。

- ・また、電子書籍での読書率においては上昇傾向にあることから、活字離れが新出メディアへの当てつけのように使われていると考えられる。例：第一次「活字離れ論」は1982年。カラーテレビ普及率が100パーセントとなった年。

- ・活字離れの根本原因とされている10代・20代の総合読書率・書籍読書率はピーク時の1997年と比較すると、10～20％低下しているが、2010年頃からは安定した状態を保っており、低下していない。

- ・なお、若者の読解力または語彙力の低下は1958年頃からたびたび問題視されており、2003年頃からは若者の読解力が低い理由としては読書率の低下が挙げられている。そのデータとしては2000年の総合読書率84％が2003年には65％まで減少している。**しかし、その後は60～70の間で横ばいである。**

※ここでのいう総合読書率はあらゆる書籍を含んだデータで、書籍読書率は書籍のみのデータである。

※読書率は読書量ではなく、読書したかどうかの割合を示す。上記調査では、16歳以上の男女計3600人を対象としている。

【研究②】

- ・読書率の調査を進める中で「**若者の読解力の低下は読書率の低下が原因**」という記事を見つけた。

- ・しかし、研究①の結果から、読書率の低下が2003年頃からは起こっていないと考えられる。では、読解力低下の原因というのはどういうことなのだろうか。この矛盾の調査、特に読解力の定義、データ元、それに対する日本の対応について調査していく。

【調査②】

●読解力の定義

文章などを読み解く能力を指す。とりわけ日本では、国語教育を想定した上で、「教材としての文章の内容を正確に読み取る」という意味合いである。

しかし近年、PISAの調査結果から、日本は国際的に見て読解力が高い水準にないことが明らかとなっている。**この調査における、「読解力」に相当する分野は「PISA型読解力」などの表現で従来の用法と区別されている。**

「読解力の低下」とはこの「PISA型読解力」の低下を指す。2000年から3年ごとのPISA調査で（8位⇒14位⇒15位⇒8位⇒4位⇒8位⇒15位）と低迷傾向にあることを指す。

【PISAの読解力調査】

- ・経済協力開発機構（OECD）が2018年に実施した国際学習到達度調査（PISA）で、日本は「読解力」の成績が再び落ち込んだ。

（15位）

平均正答率：記述式57％で前回比8ポイント減

選択式61％で前回比1ポイント減

- ・数学、科学調査において日本は好成績を保っている。



OECD PISA2018のポイント

- ・OECD加盟国平均に比べて日本の15歳は「**読書は、大好きな趣味の一つだ。**」「**本の内容について人と話すのが好きだ**」と、読書は楽しむものであるという傾向が10ポイントほど高い。

- ・2012年の調査（4位）から、2018年の調査（15位）で、総読書率は低下しておらず、しかも、「読書好き」な日本の15歳であるにもかかわらず、「読解力」が4位から15位へと低下した理由には「PISA型読解力」の弱さ、「情報を探し出す力」と「情報を評価し、熟考する力」の低下が挙げられる。

- ・したがって、日本の15歳の読書のあり方とPISA型読解力とは大きく異なっている。

【文科省の資料】

- ・新学習指導要領は、各科目で扱う文章を「文学的」「論理的」「実用的」の三つに区分。例えば論理国語には「論理的」で「実用的」な文章が含まれ、「小説、物語、詩などの文学的な文章を除いた文章」を使うように記されている。

・高校生の読書活動が低調であることなどから、各科目において、高校生がそれぞれの読書の意義や価値について実感を持って認識することにつながるような指導の充実、読書活動の展開が必要である。

→国語教育がPISA調査に合わせて改訂され、文学的な文章が省かれることで読書活動は不可欠なものでは無くなり、個人に丸投げされる可能性が高まる。**このことは読書率とPISA型読解力には因果関係がない証左である。**したがって、PISA型読解力の低下の原因が読書率の低下でないことは新学習指導要領がよく示している。

【PISA型読解力向上施策への批判】

- ・数学者でお茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦氏の懸念
「文科省はこのPISAのテストに合わせるかのような教育方針に変えようとしている。」

- ・文科省は22年度から実施される高校の新学習指導要領を発表。

→「新学習指導要領では『社会に出て役に立つ』が優先され、あまりにも近視眼的だ」という意見もある。

→入試対策を踏まえると、多くが『論理国語』を選択することが予想され、近現代の文学作品に触れる機会が減少することを危惧し、非難する声が多く上がっている。

→「**読書を楽しむ**」という日本の15歳の特徴が失われてしまう危険がある。

【研究の成果と課題】

- ・活字離れや読解力の定義があいまいであり、その定義が発信者にゆだねられることが問題である。

- ・文学を肯定する立場の日本が文学、読解力の価値をOECDに合わせて「楽しむもの」から「社会に出て役立つ」へと変えてしまうことは、そのこと自体が「読書離れ」を引き起こす原因になりかねない。**どちらの読解力も両立して教育を行っていく方法を考えることが重要である。**

【読書離れを防止するために】

- ・読書への抵抗を減らすために世代に合わせたアプローチを行う必要がある。

①デジタルとの融合

→デジタル絵本、VR、音楽

②ライブラリーの改善

→より読みやすく、より楽しみやすい工夫

③国語の授業の改善

→好きな本の魅力を語る書評合戦「**ビブリオバトル**」を取り入れ、読書も促す。

謝辞 本研究は、奈良女子大学文学部の●●先生にご助言をいただきました。
深く感謝申し上げます。